

令和6年度 京都府立乙訓高等学校学校経営計画【実施段階】

学校経営方針（中期経営目標）	昨年度の成果と課題	本年度学校経営の重点目標
1 知・徳・体の調和のとれた人材の育成と、めまぐるしい社会の変化を前向きにとらえ、自分らしく幸せな未来を創り出せるように主体的に考え、感じて、判断し、行動できる人材の育成に努める。 2 「京都府教育振興プラン」及び「学校教育の重点」を踏まえ、学習指導要領に即して創意・工夫した教育課程を編成し、地域社会と連携しながら、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を実現する。	1 生徒・地域・保護者に信頼される学校としての教育活動を展開するために、落ち着いて学習ができ、部活動や学校行事にも安心して取り組める環境づくりを行うことができた。 2 授業におけるICTの効果的な活用方法の研修を行うことにより、生徒が積極的に学習活動に参加するための授業を模索し、教員の授業改善への意識がより一層高まった。 3 校内教職員連絡ツール、自動デジタル採点ソフトを導入し、学校のDX化、教職員の働き方改革がより一層前進した。 4 学校ホームページやInstagram、PTA お知らせメール、Webアプリケーションを活用し、日々の教育活動を即時に発信することができた。通学圏の中学3年生にも、同じように学校の情報を発信していく必要がある。 5 探究的な取組を充実させることはできたが、生徒の主体性をさらに醸成する取組の模索が必要である。	1 普通科・スポーツ健康科学科において、豊かな学びの創造と確かな学力の育成を図るとともに、社会の変化を幅広く視野に入れ、将来の進路を見据えた学習活動・行事等を計画・実践する。 (1) 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図る。 (2) 授業改善を推進し、「主体的・対話的で深い学び」を実現することで、学びの質をさらに高める。 (3) 授業デザインプロジェクト（JDP）や授業研究週間等を通じて教員相互の授業研究を推進する。 (4) 日常的にICTを効果的に活用するとともに、情報活用能力の育成を図る。 (5) 探究的取組の充実を図り、生涯にわたって学び続ける資質能力の育成に努める。 (6) 学習室（自習室）やクラウドの有効活用等を通して生徒の学習習慣の定着を図る。 (7) 全ての生徒が自己の存在を実感し、精神的に安心できる居場所づくりを推進する。 (8) 生徒一人一人を大切にし、希望進路の実現に向けた取組を推進する。 2 学習・部活動・学校行事等を通じて豊かな心や創造性と健やかな体の育成を目指した教育の充実にも努め、主体的に行動できる力を高める。 3 職業観、勤労観を育成するキャリア教育及び人権教育、情報教育の推進に努める。 4 家庭や地域との緊密な連携を図るとともに、校内連携体制の充実にも努め、「生徒・保護者・地域から信頼される学校」づくりを一層推進する。 (1) 一人一人が抱える個別の困難や課題に向き合い、「個性の発見とよさや可能性の伸長、社会的資質・能力の発達」に資する生徒指導を推進する。 (2) 基本的な生活習慣を確立するための指導を推進する。 (3) 規範意識の高揚に係る生徒指導を推進する。 (4) 幅広く部活動の充実を図り、学校の活性化を推進する。 (5) ボランティアへの参画等、地域社会にも貢献できる自主的な活動を推進する。 (6) 開放型地域スポーツクラブ「おとくにクラブ」の活動を通じて、地域との連携を推進する。 (7) 本校の魅力を十分に発信し、幅広く、本校志望者の増加を目指す。

領 域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評 価			成 果 と 課 題
教 務 部	組織的な校務運営の推進	時間割編成及び管理、定期考査運営、生徒在籍管理、科目登録・講座編成、教科書届出、指導要録管理、基礎学力補充、学習指導資料(成績資料、シラバス等)の作成、入学者選抜などの所管業務を適切に遂行する。	B	B	B	時間割編成、定期考査運営、科目登録、講座編制、教科書等届出事務など学習に関わる業務を適正に遂行できた。学習指導資料を作成し、教員間で情報を共有することができた。
		校務システムの円滑な運用を推進し、成績、出欠管理、指導要録、調査書等、職員が能率よく業務を遂行できる環境を整備する。	A			入学者選抜は過密な業務日程であったが、最大限効率的に運営することができた。 校務システムの運用を円滑に行うことができた。成績処理等の業務効率化に寄与した。入力データの点検について、手順を整備した。出欠について日々入力が定着したことで、より正確に出欠を管理することができた。
	新学習指導要領に適した授業の推進及び、基礎的・基本的な知識及び技能の習得	基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図るため、学習習慣を身につけさせる。授業研究週間や研修会等を通して授業改善を推進し、「主体的・対話的で深い学び」を実現することで、学びの質をさらに高める。	B	B		授業研究週間や研修会を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためのタブレットの有効活用方法について、研究を進めた。
		成績不振生徒対象に定期考査前に「放課後学習講座」を効果的に実施し、成績不振者をさらに減少させる。	B			生徒の主体的に学習に取り組む態度を育む取組として、定期考査前に基礎学力補充を実施した。成績不振生徒は減少傾向にあるものの、取組のあり方について今後も検討していく。
総務企画部	広報活動の充実	本校HP及びInstagramのきめ細やかな更新を行うことで本校の取組を広く発信する。 家庭との連携をさらに緊密にするために、アプリ等のツールを有効活用する。	B	B	B	学校HPやInstagramを用いて、学校行事や特色ある校内の取組を中心に発信に努めた。HPのリニューアルも行い、できる限りタイムリーに更新し、学校の魅力を発信することを心掛けた。 連絡ツールの使用状況を見直し、次年度よりGoogle Classroomに一本化することで、簡潔に使用できるようにする。
		普通科、スポーツ健康科学科問わず本校の特色や、魅力、取組や生徒の活躍を発信し、中学生に本校に対して興味・理解を得られるような広報活動を推進する。 乙訓地域及び近隣の中学校への出前授業・中学校訪問や学校説明会を通して、本校を志望する生徒の確保に努める。	A			学校説明会や中学校訪問、地元中学校への出前授業や塾訪問等を通じて、本校の魅力、特にコースの特色について積極的に打ち出した。今年度も地元8中学校をはじめ、志願者数が多い近隣学校を重点的に訪問し、進路主任と情報交換を行った。 前期入試において、普通科は昨年度に比べて志願者数は減ったものの、地元中学の志願者が増えたことで、一定数を確保することができた。また、スポーツ健康科学科は昨年度よりも志願者数を増やすことができた。

	「総合的な探究の時間」の学習・取組の充実	各学年・コースにおいて、ICTを活用した取組を取り入れる。生徒の情報活用を積極的に増やし、情報活用能力を育成しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図り、生涯にわたった学び続けることのできる素養を身に付けさせる。	B	B		学年・コースに応じた特色ある活動を実施した。全体の成果発表会も実施することが出来た。 探究学習を充実させる狙いで、1・3年次に外部のプログラムを試験的に導入。次年度より探究活動の「土台作り」として、1年次に採用する。引き続き、全学年で探究活動を充実させていくよう取り組んでいく。
		学年・コースに応じた特色ある活動から、プレゼンテーションや文章表現などの情報発信能力を身につけることで、生徒自身のキャリア形成の一助となるような取組を展開する。				
生徒指導部	個々に応じた生徒指導と規範意識の高揚	個別の困難や課題がある中で、一人一人の生徒と向き合い、教職員間の情報共有を充実させ、問題行動の未然防止に努める。また、学年部を中心に各分掌と連携をとり、社会的資質・能力の発達を目指して生徒個々に応じた指導を行う。	B	B	B	教職員が温度差なく一致した方針の下で、生徒指導を行うことができるように努めた。今後、さらに一人ひとりを丁寧に指導できる体制を整える必要がある。 今年度からタブレットの学校管理が外れたので、教員の共通理解・授業中のルールを徹底した。結果、大きなトラブルはなかった。 遅刻指導は、3年生の人数が多かった。特定の生徒が繰り返し遅刻をしているので、意識を高めていくためにも継続して指導していく必要がある。
		基本的生活習慣の確立として生活規律（遅刻、ネットモラル、身だしなみ）の指導や、自転車を中心とした安全指導を行う。また、個性の理解や発見とともに生徒が安心して安全に学校生活が送れるようにするための人権教育など、社会人として通用する規範意識の高揚を図る。	B			
	生徒会活動の充実と部活動の活性化	生徒会活動においては、毎週の定例会議を活用し、学校生活をよりよいものにしていけるよう、全校生徒の代表としての自覚ある活動を促す。また、一つ一つの取り組みの意義目的を押さえながら、全校生徒が主体的に学校生活を送ることができる生徒会の育成に努める。	A	B		文化祭は2、3年生が演劇、1年生が仮装パフォーマンスを実施し、準備段階から生徒たち自身で主体的に取り組む姿が多く見られた。また、キッチンカー、アピールCM動画の作成など、昨年度から始めた取組についても継続して実施することができた。体育祭は体育委員・部活動の部員が主体となって、準備・運営を行うことができ、今年度は、新たに応援合戦を生徒主体で実施し、生徒の声を取り入れることができた。 部活動の活動状況については、1年生の加入率が昨年の83%から86%へ増加したが、2、3年生の加入率（定着率）が減少した。
		部活動の入部率・定着率の向上、競技レベルの向上を図るとともに定期的なキャプテン会議の実施によって部活動の意義を浸透させ、学校生活の規律やマナーの向上を図る。また、ボランティア活動の広報など、課外活動の充実を図る。	B			
進路指導部	進路実現に向けての取組	進路目標を明確にするための自己発見を促す取組を通じて、自らの将来に明確なビジョンを持たせるためのキャリア教育を推進する。面談や面接を通じて生徒一人一人のニーズに合った進路目標の実現と、実現のための学習法を適切に指導する。	A	A		1年生対象に12月、2年生対象に外部講師による進路学習を実施、さらに2年生対象に志望理由書作成を通して自らの進路について考えさせる指導を行った。また冬季休業中に行った集中学習会では学習への意欲的な取組と進路意識の高揚に大きな効果が見られた。

		探究活動で発表・作成したものを成果物として作成し、ICTを活用しながら昇華させ総合型選抜や学校推薦型選抜でのプレゼンテーションや自己推薦書などの作成指導を行う。	A		B	総合型選抜及び学校推薦型選抜受験生徒を対象に志望理由書及び面接対策講座を実施した。その結果、総合型選抜による合格者の大幅な増加を果たすことができた。
	学力向上に向けての取組	授業での学びと放課後の補習、自習室での自学自習を有機的に結びつけ、生徒一人一人の目標や狙いに応じた個別最適な学力方法を提案し、実行させる。	B	B		放課後及び長期休業中の進学補習講座に多くの生徒が参加、学力向上に向け積極的な学習に取り組んだ。1、2年生は土曜活用講座で模擬試験に向けた対策を実施、発展的な学習を進めることができた。
		新学習指導要領に沿った入試初年度を迎える。進路指導方針を固め、実行して行くことで新入試に対応できる対策を講じる。学外の各種説明会やセミナーに参加し、進路指導における最新情報に基づいた進路指導を展開する。	B			新学習指導要領に基づく初年度入試に対応すべく情報の収集に努めるとともに新科目「情報」など大学入学共通テストの研究を外部とも連携しつつ進めた。
図 書 部	図書館の円滑な運営と 図書館教育の充実	(1) 図書館利用者、来館者を増やすために、積極的に啓発、広報活動を行い、イベントなどを実施することで本や図書館への関心を高める。 (2) 授業・行事・特別活動において、各教科・分掌との連携を深める。学びの質の向上に資するため、特に、調べ学習におけるタブレット利用との円滑な連携を図る。 (3) 蔵書の充実を図ると共に、公共図書館や他校の図書館等と連携し、必要な資料を貸借することで、教育活動を支え、生徒の教養の育成を促す資料の充実を図る。 (4) コンピュータによる書籍管理・検索・貸出業務を実施する。	B	B	B	来館者とのコミュニケーションを大切にする地道な取組が実を結び始め、年度後半は、「リピーター」が増えてきた。落ち着いた読書スペースとして、また、HR教室で過ごしにくい生徒の居場所として、一定の役割を果たす事ができた。様々な広報を行い、ホームページなどでのアピールもおこなったが、図書館の存在が十分に周知されているとは言いがたい現状がある。ICTやタブレット学習に関しては課題が多い。まず、Wi-Fi環境が整っていないこと。また、探究学習などに関しては、学習内容に図書部としてどう関わるのかが不明確で、単なる「場所貸し」にとどまっている。総務企画部などとの連携が必要ではないかと思われる。
		図書委員会の充実	(1) 図書委員会活動を活発なものにし、読書週間等の行事の充実を図る。 (2) 図書館見学会・図書委員会交流会等、他校との交流や他校の取組から学べる機会に積極的参加する。			A
保 健 部	心身ともに安心できる居場所づくりのための保	各種健康診断を計画に沿って実施し、生徒の実態に応じて、生徒自らが自身の健康の保持増進を図ることができるようにする。また、保健だよりや各種研修・講演会を通じて、生徒・教職員それぞれに対して、保健に関わる事項の知識の向上や啓発を図る。	B		B	全教職員を対象とした研修会だけでなく、特別支援会議のメンバーを中心にした研修会を実施することもでき、知識を向上させることができた。月に1回発行した保健だよりや保健委員の取組を通じて、生徒に対しても保健に関わる事項について、意識の向上を図った。

	健に関する知識・意識の向上	カウンセリングや特別な支援を必要とする生徒に対して、担任をはじめとする関係する教職員や保護者等が連携を図り、困難を抱える生徒理解を推進し、適切な指導支援をおこなう。また、カウンセリングが継続して必要になる生徒が出た場合には、必要機関とも連携を取り、個に応じて該当生徒の成長につながる対応をする。	B		B	必要に応じて教科担当者会議を開き、特別な支援が必要な生徒に対して情報を共有することができた。また、教育相談会議を通じて、資料の様式の見直しなど、様々な点で改善することができた。
	学習活動の質を高めるための校内環境の美化・整備	定期的に啓発をしながら、通常清掃や大掃除が効果的に行われるようにし、生徒と教職員が一体となって、校内環境を美化・整備し、その状態が維持できるように努める。具体的には、美化週間を各学期1回程度設定し、美化委員会で清掃の点検を行う。	B	B		美化委員が中心となって、大掃除や通常清掃で清掃の点検などを行うことができた。また、清掃に必要な用具は毎日チェックし、滞りなく清掃が行われる体制を築いた。
		環境検査を学校薬剤師の協力を得て計画的に実施し、その結果に基づいて教室内の二酸化炭素濃度の削減など教育環境を整備する。	B			環境検査は計画的に行われ、その結果を供覧する体制をとることができた。その中で特に教室内の換気については、保健だよりや保健委員の取組を通じて啓発し、環境整備の一助となった。
事務部	高等学校教育の変化に対応する教育活動の促進と支援	学校DX推進チーム、授業デザインプロジェクトによる新しい教育活動の形を具現化する取組を、財務を中心とした専門領域の面から模索・促進する。	A	A		地学実験室をD-Labに整備することができ、新たな教育活動の形を具現化する教室を作れた。 次年度以降は、もっと計画段階から教員とコミュニケーションを図り、財務の面でサポートしたい。
		授業改善を推進し、「主体的・対話的で深い学び」の実現するための取り組みをより実効あるものとするため、担当分掌と情報を共有しながら、財務を中心とした専門領域の面から支える。	B			
	安心安全な学校生活の確保	在校時並びに卒業後の就（修）学を支援する施策を、タイムリーに、わかりやすく届けることにより、生徒一人一人が学校生活に打ち込める環境を整える。	B	B	B	在学中に受けられる各種奨学金のお知らせや卒業後の奨学金の制度について、ホームページへの掲載又はGoogleClassroomによる生徒への配信により、周知漏れがないように努めた。 日常的に校内を巡回し、危険個所の対応に努めた。また、教員から寄せられた施設設備の不具合に対してできる範囲で対応した。
		日常的な点検や対策を通じた適切な施設管理と設備運営により、施設設備の不具合を起因とする事故事象を未然に防ぐ。	B			
第1学年部	高校生としてのふさわしい生活習慣・学習習慣の定着	学習習慣を確立させるためにも、基本的な生活習慣を確立させる。そのために、日々の遅刻指導・服装指導の徹底など、授業規律を守るよう指導する。	B	B	B	各分掌と連携して、指導に当たることができた。特定の生徒が遅刻や服装違反を繰り返すことがあったので次年度の課題といえる。
		朝学習、土曜活用、タブレット利用学習などを様々な角度で展開し、学習習慣を確立させる。 進路実現に向け、模擬試験などを積極的に活用し2，3年次を見すえた指導を行う。	B			模試の分析などを積極的に行い、面談等を通じて学習に対する意欲向上に努めた。上位層だけでなく、下位層を含めた全体的な底上げが課題として残った。

	学習・部活動・学校行事を通じて主体的に行動できる力の習得	ホームルーム活動・学校行事へ積極的に取り組むことで集団としての力をつける。集団の中での自分の役割を自覚し、主体的に行動する力をつけさせるとともに、豊かな心や創造性と健やかな身体の育成に努める。	B	B		文化祭や体育祭、校外学習などの行事を通じて、集団の中で行動する力を伸ばすことができた。次年度は与えられた役割だけでなく自ら考え動く力を伸ばしたい。
		集団での生活を通し、自他ともに多様性を認め高めあう集団作りを行う。また集団の中での規範意識の高揚に努める。	B			学期ごとに学年集会を開き、学年としての意識向上に努めた。学期が進むにつれて、ルール・マナーが緩くなった部分があったので改善していきたい。
第2学年部	豊かな学びの創造と確かな学力の育成及び希望進路の実現	授業を大切にし、しっかりと受ける姿勢を指導する。また朝学習や課題を提出させることで家庭学習を行う習慣の定着を図るとともに希望進路の実現に向けた学力を育成する。	B	B	B	朝学習への取組に対する姿勢が継続的に学習する姿勢につながり授業も前向きに受けることができた。
		定期的な面談、模試の返却時の指導、保護者、教科担当、部顧問等と連携し、生徒理解に努めよりよい進路指導の充実を図る。また進路学習を定期的に計画し、希望進路実現へ向けての目標を明確にする。	B			定期的に行う面談以外にも日々の学校生活の中で生徒の状況を把握し部顧問、教科担当とも状況を共有し指導に当たることができた。また進路学習の機会を通して生徒の進路希望も丁寧に聞き取り把握し指導を行った。
	豊かな心や創造性と健やかな体の育成	学校行事、HR活動、研修旅行、部活動、総合的な探究の時間などの取り組みを通して、リーダーの育成及び一人一人が主体的に取り組む姿勢を支援し、中軸学年としての意識の高揚を図る。また生徒間での協働作業を通し互いに刺激しあい、豊かな心を育む。	A	B		それぞれの場面において、主体的に生徒が動き、各クラスにおいてリーダーを中心に協力してまとめ、成功させようとする意欲がみられ成長を感じた。また、行事後の満足感も高く、学校生活への意欲の高まりにつながった。
		家庭と連携をとりながら、安定した基本的生活習慣を確立させ、心身ともに健やかな集団を育成する。	B			2学期後半ごろより遅刻・欠席が目立つようになった。また、身だしなみ等で指導する生徒も見られ生活指導する機会が増えた。引き続き基本的生活習慣について指導していくことが必要である。
第3学年部	豊かな学びの創造と確かな学力の育成及び希望進路の実現	授業を大切にし、朝学習や進学補習・模擬試験などに主体的に取り組む姿勢を推奨し、希望進路の実現に必要な学力の伸長を支援し、希望進路の実現を図る。	A	A	B	進学補習の継続参加者が多く、総合型選抜や国公立推薦型などへの個別指導にも粘り強く取り組んだ。自習室の利用も多く、学力の伸長もあり、多数の大学合格者が出た。
		進路指導部と定期的に会議を持ち、情報共有等連携を図り、生徒や保護者との面談を実施し、生徒自身が選択する進路の方針を支援する。	A			小論文指導・模擬面接など進路指導部と連携し早めの指導が功を奏した。進路検討会議で共有した内容から高いレベルを目指す受験校指導も可能となった。保護者との連携もと、総合型から出願するなど進路先決定の支援を行えた。
	主体的に行動できる力と規範意識を含めた社会的資質の向上	委員会活動やクラス活動においてリーダーを中心に主体的に活動することを支援し、最高学年として、質の高いパフォーマンスができるよう支援し、社会的資質の向上を図る。	B	B		校外学習や文化祭・体育祭ではそれぞれの委員が中心となり、企画運営を行った。特に初めての演劇ではクラスで協力し、練習に励み独自の工夫が見られた。

		自分の将来の姿を常に意識させ、自覚のある行動を取ることで、高校生活の集大成と呼ぶにふさわしい学年集団を目指すことを支援する。	B			一人一人に応じた指導が必要な生徒が多く、教員は多忙となった。その一方、各分掌各教科のサポートを受け、成長した生徒も多く、その生徒達を中心に学年として活動を進めることができたと感じている。
スポーツ健康科学科	スポーツ健康科学科の充実に向けた取組の推進	スポーツ健康科学科の学習内容と事業等について、より専門的な洗練された内容となるよう、その体系化を進める。	B	B	B	教員・医療看護系をはじめ、様々な進路を希望する生徒で構成されるクラスであるため、進路実現に向けた取組は、スポーツを多角的な視点で捉える内容を中心に「スポーツ概論」「スポーツ総合演習」の専門科目の中で行った。これらの授業では、主体的な学びの姿勢を身につけるため、探究学習のスタイルを取り入れた。その成果として、2年次における研究発表の充実につなげることができた。また、専門科目において新たに購入したフォースプレートを用いての実習や分析、統計処理についても学習させた。
		専門科目の効果的な学習を展開し、将来の進路を見据えた学習内容を計画・実践し、スポーツ科学や健康科学、社会学等に対する興味を深め、成果としての研究発表の質をさらに向上させる。また、「おとくにクラブ」の活動を通じて、地域との連携を推進する。	B			
		生徒一人一人の希望進路実現に向けた学力の向上・定着を図る。	A	A		クラス内における学力の幅が広がる傾向が見られる。上、中、下位層それぞれに対して進路実現に向けた学力向上・定着を図るため、細やかな講座編制が必要であり、成績上位層に対しては、普通科発展クラスと併せた講座編制の必要性を感じる。競技力向上においては、全国高校総体、国スポなどの全国大会に延べ21名が出場し、2名が全国優勝を果たした。
		競技力向上を図り、重点種目にとどまらず、多くの種目で全国大会出場者を増加させる。	B			

学校運営協議会による評価	・産官学連携をさらに深め、次年度以降も特色ある活動が増えるとよい。 ・DXハイスクール・AI部などICT利活用や理系人材育成等、新しいチャレンジを進められた。 ・文化系部活動の強化・広報にも力を入れる必要がある。 ・A評価が増えた。目標を十分に達成している項目については、高く評価すべきである。
--------------	--

次年度に向けた改善の方向性	・乙訓高校のさらなる特色化・魅力化のため、スクール・ポリシーの再検討を行う。 ・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善をさらに推し進める。 ・ICTを有効に活用した教育活動を推進し、生徒の学びの充実と教職員の働き方改革の両立を目指す。 ・産官学の連携を進め、社会に開かれた教育課程による教育を実践し、生徒の主体性を育て自己効力感の向上を図る。
---------------	---